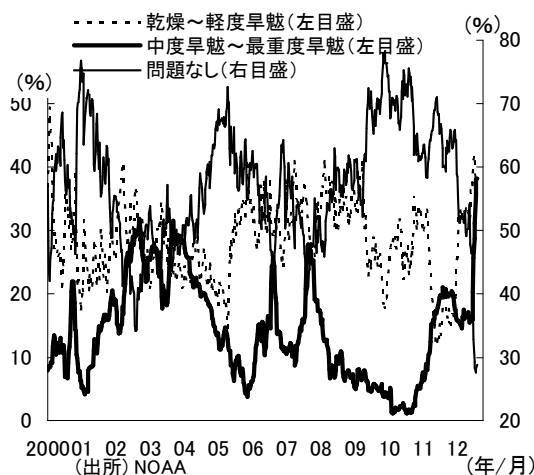


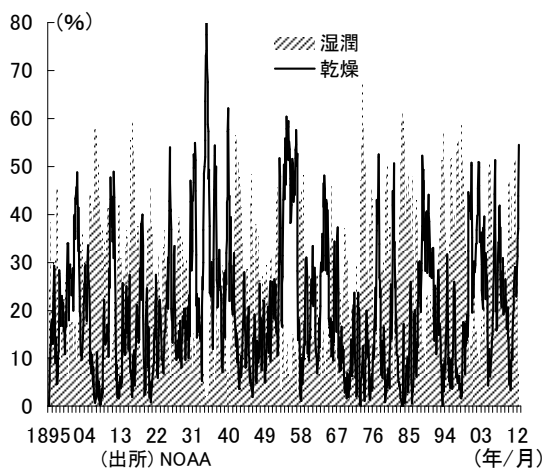
1956年以来の米国早魃 ～ 過去の湿润土壤回復は緩慢 ～

- (1) 今回、アメリカを襲った早魃と熱波は数十年に一度の深刻さとの見方。そこでNOAA、すなわち米海洋気象庁作成の早魃指数をみると、2000年以降最悪（図表1）。同指数は早魃の深刻度別に、①乾燥、②軽度の早魃、③中度の早魃、④重度の早魃、⑤最重度の早魃、の5段階に分ける一方、乾燥、あるいは早魃に見舞われていないエリアを問題なしとして、合計6区分を設定。もともと、全区分の推移を図示すると輻轉するため、第I区分として①乾燥と②軽度の早魃を合算、第II区分は中度以上の早魃として③～⑤を合計、第III区分は問題なしとし、これまでの推移をみると、第I区分のレベルは過去ピークと同水準であるものの、第II区分では02～03年に記録した既往ピークを大きく凌駕。一方、第III区分の問題なしでは02年のボトムを下回り、過去最低。加えて、今回の特徴は急速かつ大幅な第II区分の増加。
- (2) さらに、エリア別バラツキの大きさ（図表2）。アパラチア山脈以東とロッキー山脈以西では例年並みの降水があり、問題なしや①乾燥区分が最大。それに対して、ハイプレーンズや西部、コーンと大豆の主要生産地である中西部では中度以上の早魃エリアが大半。穀倉地帯での早魃は上記、全米全体でみた情勢を上回る深刻さ。
- (3) 早魃指数の遡及は短期間。それに対して湿润土壤と乾燥土壤の面積シェアは、早魃の深刻度は不詳ながら、1895年まで遡及。それによると本年6月の乾燥土壤は54.6%。6月を上回った時期は1934年3～12月、39年11月～40年1月、54年の4月と6月～9月、11月～55年1月と3月、56年12月のみ（図表3）。春から夏に限定すると過去34年と54年の2回。両年とも早魃の深刻さから土壤回復が遅延。湿润土壤シェアが冬小麦収穫期の翌春まで低迷（図表4）。小麦産地のハイプレーンズが中西部を上回る深刻な早魃の現状に照らせば、小麦を中心に今後一段の価格上昇が視野。

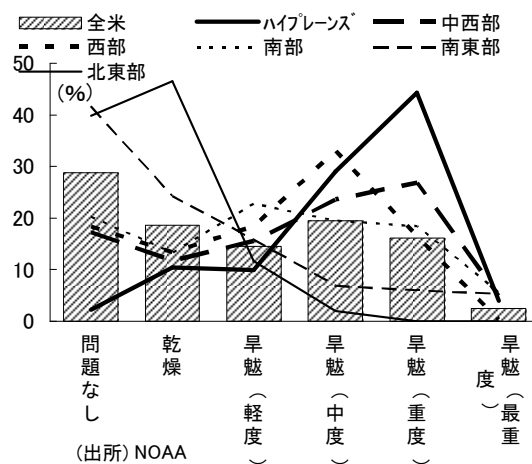
（図表1）アメリカ早魃指数の推移



（図表3）湿润・乾燥土壤の面積シェア



（図表2）エリア別早魃指数(2012年7月31日)



（図表4）湿润・乾燥面積シェア(各年6月～翌年4月)

